

## 総評

---

Charles Univ	金杉ペトラ
Chiang May Univ	中井仙丈
Dalian Univ of Technology	王冲
Busan Univ of Foreign Studies	諏訪 昭宏
The Univ of Bonn	吉岡 薫
The Univ of Warsaw	岡崎 恒夫
Vassar College	ドラージ土屋浩美
Ochanomizu University	森山 新



# 国際学生フォーラムに参加して

金杉ペトラ（カレル大学）

## 1. 学生フォーラムについて

第2回の世界8大学合同国際学生フォーラムは「世界のエネルギー・環境問題を考える：東日本大震災を教訓に」というテーマで行なわれた。フォーラムの重点として研究発表会が実施された。ところが、学生はそれぞれの発表を準備する段階で、フォーラムの発表会で、フォーラムに伴うプログラムによって「世界のエネルギー」というテーマを様々な観点から検討することができた。

プレゼンテーションの準備の段階では、学生はそれぞれの国のエネルギー状況、国の方針、住民の態度など、狭い範囲一ほぼ一点一でエネルギー問題を検討し、自分なりに情報を整理し結論を出した。

フォーラムに参加し、他のグループの発表を聞いて、議論をし、同じ問題を更に広い視点で再検討できた。油を製造する微細藻類などの新しいエネルギーの情報、分散化などのエネルギーに対する新しい態度を意識させられ、エネルギー問題の実にグローバル的な広がり把握できた。一点とした、ある国だけではなく、視点を広めて、見方は二次元的になった。

フォーラムのプログラムの一つとして、日比谷公園のイベントと特に14日のセミナーの発表で、原子力エネルギーの危険性を身を持って体験した方の話を聞いて、問題の深さも明らかになり、学生の見方は最初より広く、深くなった。まるで三次元になったようである。

日本語の学生としては、日本語で発表し、日本語での発表を聞き、日本語で質問するなり、議論するなりできた。学生は言葉が完璧でなくても、言いたいことがあった時、心配なく自分なりにまとめて発言できる打ち解けた雰囲気であったことも非常によかった。これからの勉強のための動機付けになるのは確実である。

フォーラムに欠かせない文化交流の部分もあるゆる意味で学生のためになる。特に欧州からの学生は御茶ノ水大学の先生方と学生の素晴らしいもてなしにびっくりし、それも文化体験として勉強になった。

学生と反省会のコメントとしては、御茶の水大学に行けた感謝以外は、滅多に意見の交換ができない中国人・タイ人と話せて非常によかったということ、これから日本語をもっとしっかり勉強したいということと異文化交流にもっと参加したいということが主なコメントだった。教師としては勉強と交流に対する積極的な態度は嬉しい。

## 2. MMCC の活動について

技術的な問題があり、カレル大学はMMCCのテレビ会議に二回ぐらいしか参加していない。森山先生の公園で言及された「交流法」は動機付けを与える非常に強力な教授法に目覚め、カレル大学でももっと積極的に参加できればと思った。来学期から参加できる方法を考えていきたい。

提案としては、日本語を学士・修士課程の卒業論文をテーマにしている学生が卒業論文の中間発表と最終発表をMMCCの枠組みの中で実施すればいいのではないか。日本語は皆共通するテーマで、色々フィードバックをもらえること、発表の準備としてもとめること学生にとって非常にプラスになると思われる。だからこそ、経験のある先生と相談しながら、カレル大学でもMMCCに参加出来るような方法を必ず考えていきたいと思う。

# 国際学生フォーラムに参加して

中井 仙丈（チェンマイ大学）

## 1. 学生フォーラムについて

今回のフォーラムでは、東日本大震災の教訓を踏まえ、世界各国のエネルギー・環境問題をテーマに、12日と13日の2日間にわたり学生発表が行われた。発表は、これまで学生が行ってきた調査をもとに、各国の原子力発電政策と原発に対する市民の意見について報告された。

原発というテーマは、その是非について論争が続いており、容易に結論を導くことはできないものの、学生は様々な意見をバランスよく発表していたと感じた。それぞれの国の原発政策や、それに対する国民の意見が丹念に調べられており、日本語でわかりやすく発表されていた。

12日に行われたオーストラリアとニュージーランドとのテレビ会議では、大きな通信障害もなく、活発な意見交換が行われた。改めて通信プラットフォームの安定性の重要性を痛感させられた。

今回のテーマは、東日本大震災に絡んだもので、必然的に社会性を持たざるをえない。11日には震災関連の集いへの参加、14日には学生による被災地の調査結果の発表と震災復興に携わる地元の方々からの報告が用意されていたことから、今回のフォーラムを卓上の議論に終わらせないための工夫と意気込みが感じられた。学生発表に限って言えば、少々マクロ的議論に偏った感はあるものの、全体の方向性としては間違っていないと思われた。

しかし、今回のフォーラムが、グローバル化に対する大学教育の挑戦であるとするれば、もう少し突っ込んだ議論があってもよかったのかもしれない。学生の発表から、それぞれの国々には固有の利害関係や問題意識があることがよく理解できた。ただ、グローバル化の現実、異質なものととの接触であり、違和感や軋轢を伴うことも多い。また国家や民族という枠組みを超えてゆくことも容易なことではない。学生の間に、そうしたグローバル化の現実を体験しておくことは、将来学生が研究を行う際はもとより、卒業後社会人として活躍する際にも必ず役に立つはずである。そうした意味で、もう少し踏み込んだ議論がされてもよかったのではないだろうか。

自分が引率したタイ・チェンマイ大の学生は、練習時よりも遥かにうまく発表できた。一般的にタイ人の学生は、口頭発表を得意としている。彼女たちにとって今後の課題は、取り組むテーマについて更に掘り下げる努力を行うことであろう。単に拾い読みしたものを発表するのではなく、自分の立場から考えて、ものを言う訓練が必要だと感じた。また、他大の学生との質疑応答の際に、日本語の問題からか、話がうまくかみ合わなかった場面

もあり、今後の課題がはっきりしたことは収穫であった。学生たち自身が、そうした点について、自覚してくれればと密かに期待している。

今回フォーラムに参加した学生たちが、次の代に自分たちの経験を伝えてくれるよう、チェンマイ大学でも努力していきたい。また、発表する学生だけでなく、クラス全体を巻き込んだ活動になるように、さらなる工夫が必要だとも感じている。

最後に、自分を学生に置き換えて考えてみると、豊島区という歴史に富んだ場所柄を生かした講義やツアー、長い歴史を持つお茶の水女子大学の紹介を含めることで、更に彩り豊かな活動ができるのではないかと思う。

## 2. MMCC の活動について

MMCC の理念がグローバルな思考を養うということであれば、他を知ることを通じて、己を客観的にみる機会を学生たちに提供することが、今後も活動の礎となるだろう。MMCC を通した活動を継続してゆくには、今回のフォーラムに参加した学生や教員が MMCC の理念を継承し、交流を行うための環境を積極的に築いてゆくことが必要となる。

ひとつのテーマではなく、複数の関連するテーマを用意してもよいかもしれない。幾つかのテーマごとに分科会を設け、個別に議論を進めるとともに、定期的にテレビ会議を行ったり、ビデオファイルを交換したりすることで、全体的なまとまりを保ってはどうか。もちろん、持続的に活動してゆくためには、お茶の水女子大学に負担がかかりすぎないように考慮しなければならないだろう。

社会との接点という点では、14日に被災地で活動する人たちの口から語られた証言は示唆に富んでおり、政府やマスメディアからの情報とは違った迫力があつた。既に行なわれているのかもしれないが、学生たちが研究結果を地元社会にフィードバックすることで、自らが発信する情報に責任をもち、自分たちの声に耳を傾けてくれる人たちとの対話を通じて、来年度のフォーラムのテーマを決めてもいいかもしれない。

また最後に、今回のフォーラム開催に向けてご尽力いただいたお茶の水大学の皆さんにお礼を申し上げたい。滞在中に皆さんから受けた温かいもてなしの心には、学生はもちろんのこと、私自身たいへん感銘を受けた。今後、さらなる MMCC の発展を祈願し、筆を置きたい。

# グローバル化時代の日本語教育を考える

王 冲 (大連理工大学)

## 1. 学生フォーラムについて

グローバル化時代の教育のあり方について考える場合、多様な文化や価値観を受容し、その中で自らの考え方を主張し、行動できる心豊かな人間を育成することは重要な課題であると思う。今回の学生フォーラムでは、東日本大震災の教訓を踏まえ、世界各国のエネルギー・環境問題をテーマに、発表が行われた。このように、それぞれの言葉の壁を乗り越えて、自分の考え、気持ちを頑張って相手に伝え、そして、相手の考えを理解し、相手の気持ちを受け止めて、さらに専門の壁を超えて、幅広い学びができることは、まさにグローバル化時代における日本語教育のあり方であると思う。そして、今度のフォーラムを通じて、学生のみなさんは物事について考える際に、グローバルな視点とローカルな視点の両方から考える必要性を改めて感じたのではないかと思う。

自分が引率した大連理工大学の学生は、難しい専門用語にも関わらず、学生は自国の原子力発電政策と現状を調べ、自分の意見と日本への提言を日本語でわかりやすく発表ができたと思う。しかし、本人達は難しい発表を作ったせいで、原稿の読み上げになってしまったことと質問に答えられなかったことに対して悔やんでいるようである。もうすこしユーモアがあって、物事について深く考える力があればいいと反省している様子も見られた。私自身も各国の学生達の優れているプレゼンテーション能力と日本文化が浸透している感情を込めた日本語に関心している一方、今後の日本語教育について、課題がはっきりしたという収穫もあった。

また、地震体験、震災地の体験談などの企画は学生にとって非常に貴重な経験になったと思う。今回の学生フォーラムのテーマの理解も深めることができるだろう。しかし、「多言語」と「多文化」の環境づくりのことを考えると、せつかく8カ国の大学が集まることのできたので、学生同士の交流と自国などを紹介する時間をもうすこし増やせたら、より「グローバル化」という言葉の理解を深められたらと思う。

さらに、今度の学生フォーラムは日々のMMCCの活動で身につけた要領を披露する場にもなっていると思う。そこで、学生は自分の成長を実感したり、自分の失敗を反省したりして、今後のMMCCの活動にもつながるだろう。そして、そうしたグローバル化の現実を体験することは、将来学生が社会人として活躍する際にもきっと役に立つはずである。そして、フォーラムに参加した学生には、クラスメート、そして後輩に自分たちの経験を伝えてもらうような場を設けて、受けた刺激を自分達のみならず、さらに広い範囲に広げていただきたい。

## 2. MMCC の活動について

MMCC の活動の目標がグローバル化時代に求められる外国語教育のあり方であると理解している。そうすると、文化を取り入れた総合的言語教育、文化リテラシーの育成、コミュニケーション能力の育成はその中核となるだろう。そして、TV 会議などの IT 利用はグローバルな環境の日常化を実現してくれる。

日本語教育者の立場から見れば、今まで、日本語教育に取り入れた文化の説明は、紙面で語り切れない部分と学習者の頭の中の抽象的な部分は、MMCC の活動の中で、より具体化され、リアルに感じられるようになるだろう。また、日本語を勉強しているからと言っても、コミュニケーションをとる相手は常に日本人であるとは限らない。日本人ではない人と日本語で交流する際に、自分は自文化と日本の文化のどちらで接したほうがいいのか、また、相手は自文化で接してくれているか、日本の文化で接してくれているか、とても興味深いことであるが、難しいことでもある。それこそ多文化の環境ならではの問題であると思う。日本語学習者は MMCC の活動に参加し、身を持って日本人、または他の国の日本語学習者と交流しているうちに、自分なりにその答えが見つけれられるだろう。そういったような意味でも、MMCC の活動が多文化の環境を提供してくれることはとてもありがたいと思う。今回のような学生フォーラムは MMCC の活動を通じて身につけた要領を実践することができる場にもなっていると思う。

今後の中国の MMCC の活動には、積極的に日本以外の国との交流も取り入れようと考えている。そして、多言語を考える場合、TV 会議の際に、日本語に拘らず、中国語、英語、韓国語などの使用も積極的に薦めたい。また、先生方と学生達の感想を聞いて、改めて通信プラットフォームの安定性の重要性を痛感させられた。今後の MMCC 活動での交流をより広く、スムーズに進めるため、その基盤になる IT 環境を完備することから着々と努力しようと思っている。

最後に、今回のフォーラム開催に向けてご尽力いただいたお茶の水大学の皆様に心より深く感謝を申し上げたいと思います。今後、MMCC の更なる発展を心から願っております。



## 第2回国際学生フォーラムに参加して

諏訪 昭宏（釜山外国語大学）

### 1. 学生フォーラム

東日本大震災から2年。「世界のエネルギー・環境問題を考える：東日本大震災を教訓に」というテーマのもと、MMCC でつながった世界8大学の学生による研究発表が行われた。昨年度のテレビ会議システムを利用した遠隔授業でも本テーマは扱われはしたが、各国の状況は共通のアンケート調査結果によるもののみで、実際に、テレビ会議システムを通し、学生による発表と討論が行えたのは、本学にとってはお茶の水女子大学とボン大学のみであった。それを考えると、今回のように世界8カ国8大学の学生が、一つのテーマに関し一同に議論し合えたということは、それだけでも非常に価値のあることであったと思う。加えて、どの発表も大変詳細に調査が行われ、各国の現状とその背景が十分に伝わる内容であり、学生たちの日本語力には改めて驚嘆させられた。一声で原発推進・廃止と言っても状況は様々であり、また報道で知らされる各国の政策のみならず、その国の国民の声が聞けたことは、どの学生たちにとっても新鮮なショックであり、フォーラム前のローカルな視点から、少なからずグローバルな視点でこの問題を捉えることにつながったのではないかと思う。また、翌日のセミナー「東日本大震災ワークショップ・シンポジウム」では、それまでは少なからず「日本」という外国で起きた問題として捉えていた本学の学生たちも、被災地の現状を知り、被災者の生の声を聞きながら心を動かされた様子で、今後、同様の震災に対し、どう行動すべきかを考えるきっかけになったようである。

何より、前回のフォーラムもそうであったように、主催大学であるお茶の水女子大学の学生たちの頑張りともてなしの心が、全ての参加者の心を打ち、フォーラム以前の「招待客」という受身の姿勢を主体的な気持ちへと動かさせていたように感じた。世界にいる同世代の学生たちが、今何を考え、何を行っているのかを知ることは、井の中の蛙状態であったであろう本学学生にとっては自分を見つめなおす動機となったことは確かである。このことは、学生による研究発表のみでは成し得ない効果であると思う。「交流」という背景があったからこそ生まれた結果であることに間違いはないであろう。引き続きこのようなフォーラムが行われることを切に願うと同時に、今後更なる発展のためには、発表後の学生同士の討論の時間の充実が求められると感じた。各国の発表だけに留まらず、8各国による約10日間の交流という点を生かし、国の枠を超えた研究グループを作り、議論・発表を行ったり、学生たちだけによるディスカッションの時間を設けるなど、より活発な意見交換ができる環境づくりも一考に価するのではないかと思う。

## 2. MMCC の活動について

MMCC、特にテレビ会議では一番多く参加させていただいている本学であるが、今回のフォーラムは学生たちのみならず、教員にとっても非常に良い交流の場であった。学生同様、教員にとっても、見も知らぬ相手とテレビ会議を行うことは正直抵抗があり、MMCC というオンラインではつながっていた各国の先生方と実際にお会いし、お話をさせていただいたことは今後につながる大きな収穫であったといえる。これまでは、本学は日本とドイツの2カ国のみとの交流であったが、今後は、できる限り学生の視野を広げる上でも、交流相手を広げられるよう努力していきたいと考えている。また、昨年度、はじめてディベートによるテレビ会議を行ったが、これまでのように発表→質疑という形を一步抜け出し、発表→質疑→反論といった「議論」する場が生まれたことは何よりの進展であったと思う。学生フォーラムでも感じたことではあるが、学生たちの日本語力は非常に高く、また考えもしっかりしている。ただ、お互いに警戒や遠慮が入ることで、なかなか議論とまではいかないのが現実である。しかし、ディベートという形式をとることで、学生たちの議論する場も増やすことができ、さらにMMCCを充実したものにできるのではないかと思う。今回の教員の交流を是非生かし、あらたな展開へと進めて行ければと強く願っている。

# 2012年度MMCC国際学生フォーラムに参加して

吉岡 薫 (ボン大学)

## 1. プログラムについて

東日本大震災を軸に、実に多彩で意欲的なプログラムであった。一方では学生側のそれぞれの立場からの報告があり、それは彼らのおかれている国の状況によって内容が異なっていて、非常に興味深かった。他方では震災関係の市民の集いに参加することや被災地からの報告、被災された方々からのお話などもあって、これはおそらく参加者誰にとってもインパクトの強い経験であったに違いない。海外の学生達はそれぞれの国で真剣にエネルギー政策や原発について考えて来日したのであるが、特に地震のない国の学生達には、現実の厳しさを感じる機会にもなったのではないかとも思う。日本でさえ震災後2年を経て「風化」という言葉を聞くのだから、例えばドイツでこの震災が過去のことになりつつあるのは無理からぬものがあるのだろう。だからこそ、このフォーラムで被災者の方々の生の声を聞き、その訴えを目にして、いろいろなことがまだまだ進行中なのだと悟ることが若い学生達に残すものは大きいと思う。

また、各大学の日本語プログラムについて知ることができたことは教師として大変興味深かった。それぞれのかかえる課題は様々であるが、この機会をスタートとして、是非これからも学び合いや学生の活動の場を共有できたらと思ったことであった。

## 2. 交流・意見交換ということについて

このフォーラムを通して非常に新鮮であったのは、本当に意思を疎通させる交流に重点がおかれたことである。日本語を学ぶ学生達は日本語での交流には当然限界があり、それを不安に思って来日したことが彼らからも発言された。しかしこのフォーラムが進むにつれて、お互いのかかえるハードルを理解した上で意思を疎通させることの大切さが、学生達にも伝わったのではないかと思う。

また、15日の国際シンポジウムの後、パネラーと学生でこのフォーラムの改善点についてオープンに話をする場を設けたことも、学生側参加者と教員側また運営側との意見交換という意味で非常に有意義であった。その際に学生側から指摘があったとおり、フォーラムを通して学生達は情報を受ける側になることが多かった。これは確かに意欲的なプログラム構成のためなのだが、お互いの発表の後にも、また被災者の方々とも、小グループで意見交換をする場を作ることを提案したい。

被災者の方々に個人的にお話を伺うということの力は、言うまでもなく聴衆の一人としている場合とは比べものにならない。また、学生同士の発表の後には、国によって原発に対する考えも大きく違う中、自由なディスカッションの機会を与えたいと思う。そのよう

に問題を掘り下げる話し合いの中から、本当に個人がグローバルに考える一歩がまた生まれて来るのではないかと思うし、そのような仲間は継続して行くチャンスがより大きいであろうとも思う。

### 3. 運営について

7カ国との連絡を取りながらの準備、またオーストラリアとニュージーランドとのテレビ会議を含む運営が滞りなく行われたのは大変素晴らしいことである。また、フォーラムを通してFacebookでの発信や海外他大学とのコミュニケーションなども活発で、非常に意欲的に映った。また、受け入れ側のお茶の水大学の学生達の努力は、フォーラムのしおりに始まりフェアウェルパーティでの寄せ書きに至るまで、様々な場面で印象的であった。

### 4. MMCCの活動について

フォーラムは私個人にとってもMMCCの活動、特にテレビ会議の意味とボン大学のプログラム内での位置づけを考え直すいい機会であった。テレビ会議が「交流の場」であるとボン側の学生に意識されるためには、やはり学生同士の顔の見えるコンタクトが早い時期から必要になるであろう。そのためには、ドイツではネット環境にあまり問題がないということを生かしてプラットフォームを選び、授業に組み込む等考えることになるだろう。

MMCCの目指すものは、自分の考えもしっかり主張しつつ、また相手を理解する努力を惜しまない、そんなことをグローバルなレベルで考える若者を育てるということであろう。ボンの学生に、これからもそのような活動に参加を続けさせていただきたいと思う。

このフォーラムに参加できて、私個人もいろいろな意味で興味深く勉強になった。この場をお借りして謝意を表したい。また、ボンの学生からはフォーラムのことを口コミで広げています、という連絡があった。他の海外の学生達と日本の学生達にも、フォーラムが終了した今がある意味でのスタートになればいいと思う。

# 2013 年度国際学生フォーラム総評

岡崎恒夫（ワルシャワ大学）

## 1. 運営

お茶の水女子大学の教官の皆様方の緻密な計画と行き届いた手配、整然とした実施のおかげで、何の滞りもなくスムーズにシンポジウムが進行したことは賞賛に値する。また、お茶大生の意欲に満ちた協力体制に支えられ、ただスケジュールをこなすだけでなく、世界から集まった学生たちの世話を通して、グローバルな連帯による協働を実践しているのが観察され、先生と学生の連携、シンポジウムの趣旨を十分に理解した上での行動は、目的を半ば達成したような様相だったことを特筆したい。

## 2. プログラム

シンポジウムの主要テーマである東日本大震災をグローバルな視点で見つめ、世界から参集した学生たちと結束して共通の意識を構築するために組まれた、例えば 11 日の「震災関連学外イベント参加」や同じ趣旨で実行された 12 日の外国とのテレビ会議、14 日の実際に被災されたかたがたによる講演などは正に的を射たプログラムだった。被災された方の講演を聞いて、私の学生たちには大震災が心の中で現実のものとなり、真剣に考えていくべきテーマになったと思う。また、「グローバル時代の日本語教育」も 8 カ国から集まった教官を中心に、今後の外国語教育のフィロゾフィーを根本から考え、構築するという、いわば時代を先取りした企画であり、大変満足のいくものだったことを強調しておきたい。

## 3. 学生フォーラム

12 日、13 日に行われた「世界のエネルギー・環境問題」の学生発表は参加国の学生がそれぞれ国の現状報告と今後の課題について話したが、実にさまざまなお国の事情があり、この問題に関する国民の意識の違い、政治・経済とのかかわりの違いなどが浮き彫りにされ、決して一筋縄では行かない現状が露呈したが、本当は各国の、この違いが分かっただけでも学生にとっては大収穫だったと思う。この認識を基盤としてグローバルという名の下に今後の活動を広げ、連帯を組織することこそ次世代の役割となることを確信する。次回への希望として「討論会」形式を採り入れた話し合いが学生間でもたれると、有効かと思われる。お互いの発言に啓発され、問題意識をより深く掘り下げ、より広く共有することができるようになるだろうと思う。

また、日本語を共通言語として外国学生と話し合い理解しあったことは、彼らが孤立して勉強しているのではなく世界に同じ仲間がいることを再認識し、心強い思いを持ったに違いない。このような認識がグローバル化という大きな課題遂行の基本になりうると信ず

る。

#### 4. グローバル時代の日本語教育

15日には、8カ国の大学から言語教育現場の紹介があった。これは、グローバルな思考環境を整えるのに大切な一歩であり、お互いの事情理解のうえで、今後の具体的な活動の日程表作りを実施する基礎となる。言語教育の直接の担当者が一堂に会したことの意義は大きい。在住国こそ違え、私たちのように日本語教育という共通の教育活動に従事している教官にしか解らない問題意識と言うものがあり、それを数日間にわたって行動をともにしながら意見交換などを通して詳細に確認出来たことはすばらしい成果だった。

今回のようなインテグレーションは理想ではあるが、経費の面からも頻繁に実施するのは難しいだろう。しかし、インターネットの時代にはそれに近い形のコンタクトが可能で、それがテレビ会議であり、スカイプ利用の共通講義などである。それらを通してリアルタイムで協働することができるので、先ずお互いのインフラを整備し、協定校同士であれば、双方に留学中の学生の援助を得て遂行すればより効果のある形で実行できると思う。前もって作成されたビデオなどを使用しての意見交換や討論は実り多い学習形態になるはずである。そのための、例えば関心調査、テーマ選び、ビデオ作成のノウハウ、第3校も交えての通信接続技術などを協力しながら模索していく必要があるようだ。

帰国後、学生たちとも話し合ったが、彼女たちは日本行きが決まったあと、「原発・代替エネルギー問題」を調べ始めたころから、徐々に日本モードに切り替わって行ったのを感じ、アンケート調査をまとめる段階で自分の中に醸成された日本関連の要素を持って渡日した。そして同じような準備をしてきた8カ国の学生と協働することによってその要素がしっかり体内に根を下ろし、自分の判断基準や感性の基礎になっていくのを感じたというような話をしていた。これこそ、複言語、複文化学習の一部となりうる要素ではないだろうか。

# フォーラムを振り返って

ドラージ土屋浩美（ヴァッサー大学）

## 1. フォーラム

一週間の学生フォーラムは実に盛りだくさんで有意義なものであった。各国の学生たちの研究発表を始め、被災者の方々の生の声までも聞く機会を頂き、原発問題や環境問題をさまざまな視点から考えるよい機会となった。現在アメリカでは原発の問題はあまり大きく議論されていない。アメリカと日本の危機意識の温度差をフォーラムで感じた。原発問題は世界の問題として考えることが大切であることを認識した。

ヴァッサーの学生にとってフォーラムは大変大きな収穫となったようだ。来日直前、中間試験の真っ只中であったということもあり、準備には睡眠時間を削るほど苦勞していた。たくさんの新しい単語を調べ、環境問題に取り組む活動家にインタビューをするなどし、やっとの思いで原稿を仕上げた。そのため、発表後の達成感は大きいものであったに違いない。短期間でこれほどインテンシブに日本語の勉強をし、発表原稿を書き上げたことは、大きな自信につながったことであろう。日本語中級程度のレベルの彼らにとって、今回のテーマは難しいものであり、要求される日本語レベルは高いものであった。しかし、そこから得た学びは計り知れない。

お茶の水女子大学の学生さんとの交流、そして同じ日本語を学ぶ他大学の学生さんとの交流も大きな収穫のひとつとなったようである。また交流は大変思い出深いものとなったようだ。それはフェアウェルパーティーで涙ながらに別れを惜しみ、近い将来の再会を約束しあう学生たちを見ていて感じられた。ゴールを目指し共に努力した者同士が、一週間を共にし、友情を育んだことから得る学びはかけがえのないものとなったことだろう。日本語がただの語学学習にとどまらず、友情を育むきっかけとなり、また世界の問題を考えるツールにもなりえたことは、教師の立場として大変うれしいことであり、私にとっても日本語教育とは何かを考えるよい機会となった。

## 2. MMCC の活動について

ヴァッサーでは日本語の講座数が限られている。したがって、リサーチが必要とされるプロジェクトなどに参加することは難しい。遠隔授業のために新たに授業を設けることは現状では不可能であるため、ヴァッサーでは今後しばらくは、希望学生を募っての簡単な交流という形で参加していこうと思う。交流相手は日本に限らず他国にも広げて行きたい。また、お茶の水女子大学の学生さんで英語での交流を望む方がいれば、日本語以外での交流も歓迎である。会話のトピックは、文化紹介、ポップカルチャーの情報交換、大学での

生活など、準備があまりいらない話題でまずは始めてみたい。ヴァッサーでは学生リーダーを選び、「日本語クラブ」のようなものを立ち上げさせ、学生主体で行ってみたいと思っている。

MMCC の今後の活動案のひとつとして、語学の授業以外のコンテンツコースにも広げてみても面白いのではないかと考えている。もし使用言語を日本語、英語の両方にするのであれば、私の担当する Gothic Literature や Popular Culture の授業で、遠隔システムを利用しての共同授業、もしくはゲストレクチャーなどを組み込むことも可能ではないだろうか。ヴァッサーの遠隔システムは比較的スムーズに行えるため、今後はもっと有効的に遠隔システムを活用していこうと思っている。いずれにしても今後どのような形で参加していくかは、さらに模索する必要がある。



## 第2回国際学生フォーラムを終えて

森山 新（お茶の水女子大学）

### 1. フォーラム

この国際学生フォーラムは8か国8大学により構成される多言語・多文化サイバーコンソーシアム（MMCC）のTV会議システムなどを用いた日常的な遠隔交流を土台に、日本学生支援機構（JASSO）のショートステイプログラムとして昨年度より開始されたものである。今年度はこれに加え、本学がグローバル人材育成推進事業に採択されたことで、学生による「東日本大震災の復興支援を考える国際学生フォーラム」に加え、教員による「グローバル時代の日本語教育を考える国際シンポジウム」を開催、グローバルな人材育成のために日本語教育をはじめとした第二言語教育を担当するわれわれ教員がどのような活動を展開すべきかについて話し合う場を持つことができた。

何よりも成果はグローバル時代に求められる多言語運用能力、多文化リテラシー、協働によるグローバルマインドの育成、ITスキルの向上の4つの点において学生たちが大きく成長を遂げることができた点である。このことはグローバル人材育成推進事業で本学が掲げる目標とも合致している。

第一に多言語運用能力は、海外の学生は日本語、日本の学生は英語を駆使し、多言語使用によりプレゼンテーション、ディスカッションが行われた点である。学生たちは単に複数の言語を使用するだけでなく、いかにすれば母語を異にする学生と円滑なコミュニケーションを図ることができるかについて常に考え、実際の発表や討論を行う姿が見うけられた。

第二に多文化リテラシーの育成である。今回は特にテーマとして「文化」を扱ってはいないが、海外の学生たちは毎日の生活の中で触れる日本の文化について理解を深めるとともに、日本の学生たちも海外の学生を迎えおもてなしをする中で、様々な文化の違いについて考えたに違いない。

第三に協働によるグローバルマインドの育成である。東日本大震災という日本の災害と世界のエネルギー政策についてグローバルな視点で見つめ、学びあうこと、そして共に生きるために何ができるかについて共に考えることは、国境を越えたグローバルな人材育成につながり、多文化リテラシーが求めるものと合致している。

第四にITスキルの育成である。今回は8大学以外にオーストラリアのモナシュ大学とはTV会議システム、ニュージーランドのオタゴ大学とはSkypeを用いて国際合同授業を行った。さらに3日間のシンポジウムはUstreamを用いて世界に中継を行った。前回のフォーラムに参加した本学の学生でパリ・ディドロ大学、ワルシャワ大学に留学中の学生が、今年も何らかの形でフォーラムに参加したいとの思いから、現地の学生を集め、Ustream

を介して参加してくれたことは、学生たちが自ら IT 技術を駆使しながらグローバルなネットワークを構築するスキルを育成することにつながったと思う。

そして何よりも喜ばしかったのは、これらの活動を学生自らが主体的に立ち上がり、各自分担を決めて行っていたことで、このことは将来様々な形でのグローバルな協働を実践するための貴重な体験となったと思う。日本の学生は、出迎え、見送り、学生のアテンド、配布物の作成、歓迎会での料理などの準備、学外イベントの立案、部・サークルなどへの協力の働きかけ、送別会、TV 会議システムや Skype、Ustream の準備や中継、司会をはじめとしたシンポジウムの企画運営、海外でのイベントの開催など、あらゆる面で先頭に立ち、フォーラムの成功に貢献した。近年、日本人学生は内向きが懸念されているが、そのような心配を払拭して余りある彼らの積極的な姿勢と態度は、傍で見ていてほんとうに喜ばしく、海外からの学生や教員にも熱く伝わったことであろう。

## 2. MMCC の活動について

MMCC は 2009 年から海外の 7 大学と本学の 8 大学で結成され、TV 会議システムなどを介して国際合同授業という形で継続的に行われてきた。今回は 7 大学から先生方をお招きし、日頃展開している MMCC の改善と発展について話し合う時間をとることができた。このことは、大きな収穫であった。本フォーラムは、サイバー空間上で日常的に行っている国際合同授業の延長として 1 年に一度行われるもので、7 大学からお招きした先生方から、海外の側ではこの活動がどのように受け止められ、何が問題で、どう改善することがさらなる発展につながるのか、といった点についてじっくりと話し合うことができた。また基調講演を通じて、この MMCC の活動とフォーラムとがどのような理念と目標のもとに行われているかについて海外の先生と学生に直接伝えることができたことも、海外の先生、学生がその理念や目標を意識しながら実践を行っていくことにつながり、大きな意味があったといえるだろう。

TV 会議システムなどを通じての交流は、施設面の問題や技術的問題に加え、十分な事前の打ち合わせもできなかつたり、日本側と海外とで求めるものが異なっていたりして、解決すべき多くの課題を抱えていた。しかし現状を把握し、お互いの立場に対する理解も深められたことで、来年度からの日常的な MMCC 活動が大きく改善され、より広範な活動に発展できる見通しが立った。

## 3. おわりに

本フォーラムと MMCC の活動は、キャンパスのグローバル化とグローバル人材育成のための重要なイベントの一つである。グローバル人材育成の先頭に立つ本学として、今回の成果を土台にこれらの活動をさらに発展させていきたいと思う。